

# 柳田国男の子ども向け読み物

— 「史心」養成過程の考察 —

三石初雄

## 一、はじめに

柳田国男の著作には、子どもの登場する場面が多い。特に1920年代中頃から1950年代初頭の論考には、そのことがいえる。柳田の、子どもへの期待は強く、燈火管制がしかれている太平洋戦争の最中、子どもたちのために読物を書くほどであった。柳田は何を子どもたちに伝えようとしていたのだろうか。そして、それほど力を注いだ子どもたちとは、柳田にとってどのような存在だったのだろうか。

本稿では、これらのことを念頭におきながら、第一に、柳田の子ども誌研究は民俗学研究の中でどう位置付けていたのか、また、そこでどのように子どもを把握し、それは子ども向け読物にどう結びついていくのか、第二には、柳田は子ども・青年たちに何を、どう訴えようとしていたのかを探ってきたい。

この課題を追求するにあたっては、『子ども風土記』『村と学童』に代表される子ども向け読物の分析に力点をおきたい。それは、子ども向けであることによって、かえって柳田の主張（仮説）と史料（話題—実証）とが鮮明に提示されており、柳田の子ども把握及びそこからくる子ども像をより具体的に知ることができると考えたからである。

## 二、柳田国男の子ども把握

### （一）「小さき者」への注目

1923（大正12）年、関東大震災の悲報をロンドンで聞いた柳田は、その年の末、早々帰国した。家屋の倒壊を前に、こんなことはしておられない

として、「早速こちらから運動をおこし、本筋の学問のために起つという決心」をしたという。<sup>(1)</sup> 欧米での人類学の進歩を眼のあたりにみた柳田は、「前代」の遺産が次々に消えてしまうことに対して、今何とかしなくてはならないと考えたのであろう。柳田は、欧米での人類学研究に刺激され、以前よりさらに民俗学研究に力を注ぐとともに、学者、政治家に歴史学の必要性を訴え、多くの講演会に出席し、新しい歴史学のあり方を説いた。柳田は、民俗学研究それ自体と、その普及、啓蒙活動の両面から、「決心」を実行に移そうとしていたのである。それらはまず、前者が『小さき者の声』『野草雑記・野鳥雑記』等の論考に、後者は講演記録集『青年と学問』に示された。

柳田は、1933（昭和8）年に、論考集『小さき者の声』を出版した。「小さき者」とは子どものことであり、その「声」とは子どもたちの遊び、童詞、慣行のことであった。柳田は、子どもたちが聞き覚え、まねて遊びにとり込んでいたものに意味をみだし、子どもの生活に目を向け、耳を傾けるように提唱したのである。

柳田は、「郷土研究といふこと」（1925年）で、史料となる記録を「計画記録」と「偶然記録」とに分けている。そこでは、特定の人々の利益を擁護するためにつくられた「計画記録」のみに依存するのではなく、他の「無数の普通人の普通生活」を伝える「偶然記録」に目を向けるよう訴えていた。それは、当時、多くの歴史学が「貴人と英傑の列伝の組合せ」<sup>(2)</sup>に終わっていたことへの満たされない気持ちの表明であり、郷土誌作成のために農村調査に出かけた時の実感<sup>(3)</sup>でもあった。

柳田は、すでに発表していた人名、家名、地名の他に、衣食住からみた生活様式、方言、命名様式、季節行事、生産作業にともなうしきたり、冠婚葬祭等の作法、神社の祭日に行われる催しもの、児童の遊戯、まじない、うらない、そして物忌禁忌等々を史料とし、「生きた住民そのもの」に目を向けた郷土研究を構想していた。<sup>(4)</sup>「児童の遊戯」は、このような民間伝承の一つであり、過去の子どもたちの生活ばかりでなく、「普通人の普通生活」を知る上での貴重な手がかりと考えられていたのである。それは、次に述べる柳田の「仮想」に示されている。

この構想にもとづいてはじめて編まれたのが『小さき者の声』であった。柳田はそこでこの二つの「仮想」、つまり仮説を出している。一つは、いまある子どもの遊び、慣行に「先祖の遺産」が保存されているということ、他の一つは、子どもは「単語製作者」であるということである。この二つの「仮想」については、これまでに庄司和晃氏が『柳田民俗学の子ども観』で分析を行っている。ここでは、それに学びながら、私なりに整理しなおし、それらにもとづいて、柳田がどのような児童文化観をもつに至ったかについて考察を進めたい。

第1の点は、「お杉たれの子」（1918年）とそれにつづく、「童児と昔」「神に代りて来る」（1924年）という題名に端的に表現されている。それは、たとえば、かごめかごめ、ままごとの遊びは、「神の口寄せ」「お盆飯」等の、かつての信仰行事、慣行を一部保存しているのではないかと、いうものである。柳田は、全国に散在する種々の「あても遊び」「臨時の食事」に関する事実の比較分類によって確かめ、さらに遊びの起源と「遊戯の進化」を探ろうとした。この他、鬼きめ、あやとり、たことこま、破魔弓、正月の物もらい等の遊びにも、かつての青年・大人の信仰行事、慣行の一部が残っている、と実例を重ねる。そして、子

どもたちの遊び、慣行は、「大昔の世の語り部」にも匹敵する「記録事業」とみることができないか、と迫る。<sup>(5)</sup>多くの場合、実年代が明確ではないが、「現代生活の横断面、即ち毎日我々の眼前に出ては消える事実のみに拠って立派に歴史は書けるものだ」<sup>(6)</sup>という柳田史学の特徴がここに現われている。

また、「小さき者の声」（1927年）には、「遊戯起源」とともに「単語製作者」の項があり、これに多くの紙面をさいている。柳田は、子どもが大人の言葉をまねて発する「片言」には、時として大人に認められ、その後使われていくものがある<sup>(7)</sup>として、月を意味する「片言」を例にあげる。その「片言」を大きく、アトサマ系とノノサン系に分け、それは礼拝の時に大人がつぶやく「あな尊と」「南無阿弥陀仏」の音にもとづくものではないか、とする。このように、子どもは、偶然ではあるが、それぞれの言葉に想像をはたかせながら新しい言葉をつくり、その過程で祈願・讃歎の祭式の一部を模倣ではあれとり込み、「月よみの歌」のように童詞として残していくのではないかと、いう。

このように、子どもの遊びとともに、童詞にも目を向けることによって、子どもの遊びから過去を知るという当初の課題が、一つ一つの物の名の地方差を手がかりに、日本語の変遷を探るという課題と深く結びついてきていることがわかる。そして、その後の方言調査によって、先の二つの仮説をさらに補強し、もう一つの仮説、「子どもが言葉の応用と伝播とに参与した部分は大きい」<sup>(8)</sup>を出すのである。

このように『小さき者の声』は、「文化の歴史は小さい者に及ばず、殊に児童の発達に就いてはおろそかであった」<sup>(9)</sup>ことへの反省を促す書であったといえよう。

当時、東京朝日新聞社論説委員であった柳田は、「偶然記録」を広く日本全国から蒐集するために

一つの調査を行った。<sup>(10)</sup>調査は、蝸牛、蛞蝓、蝻、雀、鶺鴒、時鳥、虎杖、蓬、紫雲英、堇、蒲公英等の動植物名に関する方言調査であった。調査の目的は、一つ一つの物の名を手がかりに日本語の変遷、伝播を探ることであった。柳田は、早々に調査結果を「蝸牛考」「墓の方言など」「梟の啼声」「蝻螂考」(以上、1927年)「虎杖および土筆」(1928年)、「西はどっち」(1931年)等々にまとめた。『蝸牛考』では、先の二つの仮説を前提に史料整理を行い、新たに日本語の変遷・伝播を明らかにする「目安」を設け考察している。その「目安」とは、「方言領域の集結と分散」の程度と、方言生成の理由の有無とその是非の二点であった。<sup>(11)</sup>第一の点は、いわゆる方言圏論としてまとめられたが、それは第二の点を前提としていた。柳田は、第二の点を、伝達可能にする素地、伝達を促す力、伝達のなかだちの三点から考察しようとしていた。<sup>(12)</sup>伝達を促す力については、「現在一つの方言の活躍を支持し、殊に其流伝を容易ならしめて居る力は、同時に又其語の新生を促した力」であろうという仮定で示した。<sup>(13)</sup>「新生を促した力」とは、それがすべてではないとしながらも「単語製作者」である子どもの力あるいは、「人間の子どもらしさの力」をさしていた。<sup>(14)</sup>つまり、たんぽぽの花をつかう子どもたちの遊びが四つあれば名も四つあるのである。<sup>(15)</sup>命名のもとの理由を忘れず保存し、他にも伝えることのできる条件(素地)をもっていたのが群れて遊ぶ子どもたちだったのである。柳田は、方言を受け入れる基盤をもち、しかも伝達を促し、そのなかだちをする役を果たす存在として、まず子どもを考えたのである。<sup>(16)</sup>「子どもは言葉の応用と伝播とに参与した部分は大きい」という第三の仮説は、このような脈絡の中から出されていた。

以上みてきたように、柳田が、子どもの遊び、慣行、童詞に注目した初めの理由は、民俗学研究を進める上での一方法に基づくものであった。し

かし、子どもたちの生活全体に目を向けたことによって、埋もれていた日本の子どもの文化に光があてられ、その価値が発掘されることになったのである。「子どもは先祖の遺産を保存する」「子どもは単語製作者である」「子どもは言葉の応用・伝播に大きな役割を果たした」という三つの仮説は、その後、民俗学の研究方法の充実と相まってさらに発展させられた。この子どもの生活と文化に関わる三つの仮説は、とりもなおさず、柳田の子ども把握を示したものといえよう。それは、次にみる『こども風土記』に引き継がれ、そこで整理される中で、一つの子ども観へと結晶化されるのである。

#### (二) 『こども風土記』にみる子どもの位置

『こども風土記』は、1941(昭和16)年朝日新聞に連載された母と子ども向けの読物であった。それに先だつ1936年には、日本の昔話を集めはじめ、1938年に『昔話と文学』をまとめている。それは、後に坪田譲治の『鶴の恩がえし』等の昔話へとひきつがれるものであった。柳田は、昔話の収集やおもちゃの調査で得たものを民俗学の資料とするだけでなく、この『こども風土記』のように、子どもや親に伝えていくことに気を配っていたのである。

「こども風土記」の連載は、全国に散在する子どもたちのおもちゃ、遊び、慣行、童詞の由来と意味を、それぞれ一つずつ話題として茶の間に提供するものであった。連載中には、興味深い項目「おもちゃの起り」「大人から子どもへ」「こども組」「こどもの新語」「国語と子供」が、前後数項目分のまとめとして置かれていた。それを参考に『こども風土記』をまとめると、次のようになる。<sup>(17)</sup>

とりあげている遊びの種類	まとめの内容になつてゐる項目名	柳田の主張
(1) かごめかごめに類する遊び	「おもちゃの起り」	・子どもの遊び・おもちゃの起源と日本の信仰の関係
(2) 木の枝を地面にうち込む遊び	「大人から子供へ」	・子どもの遊びは青年・成人の生活と深く関わっている
(3) あるきまつた日(正月・雛の節句等)に多い公認のいたずら	「公認の悪戯」「こども組」	・「公認の悪戯」と「七才までは神のうち」という信仰との関係 ・子どもの群と自治
(4) ままごとに関する女の子の遊び	「子どもの新語」	・ままごとの起源と信仰との関係 ・子どもは新語をつくりだす
(5) 童詞・問答	「国語と子供」	・「児童文化は孤立した別個の文化ではない」 ・子どもは国語を新しくする一つの原動力

表中の(1)の部分では、おもちゃの起源を、①どんぐりごまのような子どもがつくる遊び道具、②親たちが仕事や家事で使うものを小形化したもの、③祭事、神事でのおみやげのように、売っているもの、の三種に分けている。中でも、③でいう、当時出まわりはじめていたブリキ、セルロイド製の市販のおもちゃについて、多くふれていた。柳田は、そのおもちゃを受け入れる素地として、神社詣り等でおもちゃをおみやげに買うという風習を考えていたのである。この他、子どもの遊び、慣行の起源について、枝、釘を土にさす遊びは、かつて青年が祭で弓を射る神事に起源があるのではないか(表(2)に含まれている「弓太郎と念者」の項)、正月に物をもらい歩くという「悪戯」が村人に公認されるのは、その素地として「正月ばかりは、子どもらは神主さんだから」という村人の観方があったからではないか(表(3)の「公認の悪戯」の項)、と事例を重ねる。このような多くの事例を通して、子どものおもちゃ、遊び、慣行には、かつての生活、習俗の一部が引き継がれており、し

たがって、おもちゃ、遊びは単なる戯れではなく、貴重な「前代」の遺産である、と訴えていたのである。

このような見方は、表の(4)にある「ままごと」の項でも行われている。「ままごと」遊びを、盆に野外で行う精霊飯が遊びとして残ったもの、とみている。野外で精霊飯をつくり、無縁ぼとけを祭り、近所の家々に配る女の子たちの一生懸命働く姿から、柳田は「ままごと」は村にとって不可欠な労働であり、女の子に期待されている「村の公務」<sup>(18)</sup>といえるものではないか、という。群れて遊ぶ正月の「もぐら打ち」「鳥打ち」、物もらいと同様、「ままごと」は、「どんなに楽しくてもそれはやはり労働」<sup>(19)</sup>であると見ていた。そして、はたからみていてほほえましく、子どもたち自身強い関心を示す遊びだったからこそ、釜をたたく時の様子や材料を「小児語」として残し、新語として大人にも認められるほど普及したのであろうという。中世以後の主婦の標準語オカタを、子どもがカカサマ、カカサン、カカ、オツカーと

つくり変えたのがその一例だという。子どもたちが、「国語のうるわしい匂い、艶、うるおい」を保ちながら新語をつくったその功労は、国語の先生よりも大きい」とさえいっている。<sup>(2)</sup>

以上のことを整理すると、柳田は、第一に、遊びやおもちゃの起源を探ることを通して、現実の子どもたちの生活自体が、「前代」からの文化遺産に支えられているということを明らかにした、第二に、同時代に生活していた青年・大人の生産的・精神的な生活と子どもたちの生活との関わりを重視した、第三に、同じ地域に住む同世代の子ども「群」によって維持され、発展させられていた子どもたち自身の生活と文化に注目した、第四に、「我々は先づ童児の唱へごとが国語を新たにする一つの力である。」という確信から、子どもたちに「正しく美しいことば」をつくるよう期待する<sup>(2)</sup>とともに、国語及び国語教育の改善という課題を提示した、ということになる。これらの点は、先にとりあげた子どもの生活と文化に関わる三つの仮説の延長線上に位置するものであり、次にのべる、柳田の児童文化観、歴史観と深く関わっていた。

### (三) 柳田の児童文化観

「児童文化は孤立した別個の文化ではない」  
『こども風土記』では、現在から過去を探り、現在を過去から照らしなおし、大人と子ども、そして子ども同士の生活と文化のそれぞれの交流の重要性を示すなど、子どもの生活と文化の全体像をより明確に示すものとなっていた。つまり、先の第一から第三に整理したことからわかるように、時間軸（現存するおもちゃ、遊びが文化遺産であると考えること）、縦軸（大人と子どもの関係）、横軸（子ども同士の関係）という構造すら思いおこさせる構成をとりながら、柳田は、子どもの生活と文化の特徴を、明らかにしようとしていたのである。柳田は、「現代のいわゆる児童文化」と断りを入れながら、その特徴を次のように整理し

ている。<sup>(2)</sup>

- 1 小学校などの年齢別制度に比べて、年上の子どもが世話をやく場合が多い。
- 2 子どもが自分で思いつき、考えだした遊び方、物の名や歌、ことば、慣行、そして「小児の自治」の中には、大変おもしろいものがあり、それを味わっていると「浮世を忘れさせる」ものがある。
- 3 子どもは、それぞれの時期の「成長力」に支えられ、青年・親たちの真似に熱心であった。これは、異年齢の「こども組」という形態と、そこで維持され、創られる児童文化の内容、そしてその内容の性格（真似を通して「大人から子供へ」と伝わる文化）の基本を述べたものであった。また、この三つの整理される特徴には、①年上の子どもは年下の子の世話をすることによって自分の成長を確かめ、その自覚から喜んで世話をやき、世話をやかれる小さい子たちは、早くそのような年上の仲間入りができるよう背のびし、②多くの子どもたちは、青年・親たちの真似を通して、大人の仕事、役割を身につけていく、という農民のもつ、子ども観が描かれていた。そして、それは、子どもたちの「悪戯」も「村の公務」として公認しながら、子どもたちの成長をあたたく見守る一方、子どもたちに村社会での共同生活を自覚し、立派に「小児の役目」を果してもらいたいという大人の期待を反映するものであった。この農民の子ども観は、大藤ゆきが『児やらひ』で「一人の子供の成長ということはその両親だけの関心事でなく親戚一門はもとより部落全体の期待を受けていることだったのです。…即ち大勢の人の意志が加われば加わる程、子供の生活力は強くなり、危険に対する保障となると信じていたらしいのです」と明らかにしたものであった。

ところで、柳田は、当時農村部での二男三男の農業転出、苛酷な児童労働、娘の身売り、欠食児童激増等々の問題にはほとんどふれていない。農

民史研究においても、「ざるどじょう」「きりがえる」「たるへび」と言いつがれているような農民の生活にはほとんどふれない。「ざるどじょう」とは、ざるの中に入れられたどじょうは、もつれあっているうちに大きなどじょうは上に、小さなどじょうは下になっておちつく、ちょうどその様子が農民自身の姿である、というたとえだった。<sup>(23)</sup>柳田は、むしろ、そのことを知りつつ、それとは別の側面に目を向けていたのである。柳田は、「前代」に目を向けていた。「前代」とは、産業革命の影響を受ける以前の、しかも「一揆暴動などの事変」のない「遙かに他の無事なる永い年月」のことをさしていた。<sup>(24)</sup>先の児童文化についての整理は、当時残っていた「前代」の子どもの生活と文化についてのものであり、柳田の選択の目を通してのものであった。この点を加味して、柳田の整理した「前代の児童文化」の特徴をみなければならない。柳田が整理した特徴は、当時残っていた「前代」のものではあったが、そのことによってかえって意義深い児童文化観の提示となっていたと、いえるのである。

柳田は、「いわゆる児童文化は孤立した別個の文化ではない。」という。<sup>(25)</sup>これは、第一に、子どもに与えるものとしてだけでなく、子どもたち自らが創り、維持している児童文化があること、第二に、児童文化は、時代時代の文化全体の中で独自の意義と役割をもっていることを強調しながら、第三に、おもちゃは児童文化であると同時に、大人の文化（時代時代の文化）の、子どもを通してみた一つの様相であって、児童文化と大人の文化とは別々のものではない、という内容のものであった。この児童文化観は、先にみた、子どもは、文化遺産や、子ども同士・大人とのつながりの中でこそ育つ、という子ども観から導びかれたものといえよう。

ところで、これまでに、このような主張がなかったわけではない。「児童に児童の世界があると

いっしょに、大人の世界とのつながりがある。」といったのは北原白秋であった。<sup>(26)</sup>しかし、白秋の場合には、「社会的現実の中で子どもをとらえずに、児童心理の特殊性だけを抽象的にとりだすという弱さ」<sup>(27)</sup>を克服しきれてはいなかった。柳田においても、先にふれたように「社会的現実」を十分見すえてのことではなかったが、「児童心理の特殊性」だけに目を向けていたのではなかった。遊びを単なる遊びとしてみるのではなく、「村の公務」、親の仕事のまね、一つの労働とみているのである。日々の大人の生活との交流を重視し、それまでの文化遺産に根ざしてこそ子ども育つという子ども観をもっていたのである。児童労働の激化、農業離脱、農村の都市化にともない、子どもたちは自然から、そして両親の仕事から離れ、親子、大人と子どもとの間が疎遠になろうとしていた時代に、それを戒めるような児童文化観を、柳田は提出していたのである。

### 三、歴史教育における「歴史の欠乏」批判 —「歴史学の成長素」としての 「史心」養成の提案—

これまでみてきたように、柳田は、民俗学研究の中から、貴重な子ども観及び児童文化観を導びきだした。

ところでこの民俗学研究は、柳田の「本筋の学問のために起つという決心」の具体的なあらわれの一方であった。柳田は他方で、民俗学研究が今何故大切なのかを人々に説く必要を感じ、同時に啓蒙活動をはじめたのである。柳田の啓蒙活動に一貫してみられるのは、当時、文書、文献を「過信」しすぎていた歴史学への強い批判意識であった。

『青年と学問』（1928年）は、『小さき者の声』『野草雑記・野鳥雑記』等の執筆とほぼ同時期の講演記録集である。講演では、共通して、一つに、それまでの歴史学で明らかにしきれていな

い「平民の過去」をとりあげること、二つに、そのためには文書記録だけにたよるのではなく、「偶然記録」を重視すること、三つに、民俗学で用いている、疑問を出発点とし、事実を観察し、比較・分類するという方法をとること、を強調していた。柳田は、「関東大震災は、人が軽佻浮薄に流れていたことによる天罰だ」とする天譴説をとる者に対し、「彼らが他の碌でもない市民に代ってこの惨酷なる制裁を受けなければならぬ理由はどこにあるか」と詰問した。<sup>(28)</sup>それほど、「平民」の生活に同情の目を向けていたのである。

このように、民俗学の研究成果をもって、歴史学の対象の狭さと方法の不的確さを批判するとともに、新しい歴史研究の構想と方法を示し、それへの賛同と協力を求めた。その批判の目は、歴史学にとどまらず、そのような歴史学を醸成しかねない学校教育における歴史教育に向けられたのである。柳田は、歴史教育の問題点を次のように整理する。<sup>(29)</sup>

それは、第一に、歴史とは何かが問われていないこと、第二に「憎悪闘争」等が交錯する現実社会を隠したり、今は知る必要ないと制限する「目隠し教育」となっていること、第三に日常生活・土地土地の事情から離れた大事件、偉人の伝記の暗記を強いるものでしかないという教育内容・方法の不的確さがあること、第四は、したがって、大事件が生ずるごとに、世の中が大きく変わるかのような歴史観をいだかせていること、第五に、事実をどうたぐっていけば歴史をたどることになるかを示していないという指導手順の不備なこと、という点であった。歴史教育における「歴史の欠乏」の指摘である。<sup>(30)</sup>

これに対して柳田は、歴史とは、「こんな生活になってきたわけが何かあるはず」と探ることだとして、「現在の日本の社会が、すべて歴史の産物である」ことを力説した。<sup>(31)</sup>大震災の時がそうであったように、社会・生活が激しく変わり、将

来がつかみづらい時に、青年達に向って、これまでの歴史をふりかえるよう訴えかけたのである。柳田は、古いしきたりの意味がわからず、それらをくだらないものとして軽蔑する者が出てくることを危惧し、「淋しい感じをして自分のみ孤立して世に現われたかの如く、思っ居る青年」の姿を思いうかべていた。と同時に、正確な事実にもとずく適切な判断さえあれば、多くの不幸がまぬかれるはずであり、「学問のみが世を濟う」と確信していたのである。<sup>(32)</sup>自分自身をとりまく物事の一つ一つを歴史の中に位置づけ、同世代の仲間や先人の生活との関係をつかむためには、正確な事実を得ることを前提とした。

その後、それまでの歴史学及び歴史教育からの脱皮に方向と内容を与えるものとして、民俗学研究の必要性を訴えると同時に、日本は「フオクロアの宝島」であると、民俗学研究の可能性を強調するようになった。<sup>(33)</sup>

柳田は、その可能性をよりどころにしながら、「昔の事実を知りたいという念慮、もっと自分自身と関係のある事を、出来るだけ詳しく知りたいという向学心」を育てることが歴史教育の目的ではないか、と提案した。ここでいう「念慮」「向学心」<sup>(34)</sup>が「史心」であった。

柳田は、1940（昭和15）年、「歴史教育の話」で、この「史心」を歴史学への「接穂する台木」「歴史学の成長素」として位置づけた。そして「史心」の内容を次のように整理した。<sup>(35)</sup>

- 1 どんな物事にも歴史はあり、したがって、歴史が受けもつ領域は非常に広いこと。
- 2 これまで喜悲、大小の事件が多々ある中で、人々は生活しやすいように工夫に工夫を重ねてきていること。
- 3 世の中に現存する様々な現象には、必ず原因があること。

そして、この「史心」を、民俗学研究の方法、つまり、疑問から出発し、事実を観察し、比較、

分類するという方法にのっとり、養成しようとしたのである。柳田の提唱した歴史教育は、過去を見なおし、問いなおすことによって、現実のあり様をとらえかえし、そこから将来を見通そうとする「反省の学」<sup>(36)</sup>としての歴史であり、その見通しのもとに計画し、予測し、観察しながら現実と自分とを関連づけて行くという「実験の史学」<sup>(37)</sup>という性格をもつものであった。

ところで、1940年は、紀元2600年とされ、それに便乗した歴史物語が多数出版された年であった。そのような時の中でみると、柳田の整理は、「現時に於て、児童に歴史ものを与えるの意義は、新しい歴史観に立って、日本の皇室の有難さ、日本人としての榮譽をいかに知らせるか」と云う点にある」という児童図書検閲の趣旨にそうものであるかにみえる。しかし、そこには、この検閲の趣旨に制約されてはいない内容が含まれていたとみることができると思う。それは、むしろ、1938年10月に出された「児童読物改善ニ関スル指示要綱」にある、次のような内容に近いものであった。

「華美ナル消費面ノ偏重ヲ避け、生産面、文化ノ活躍面ヲ取入ルルコト」

「子供ノ質疑ヲ本格的ニ取扱ヒ生活化スル工夫ヲ計ルコト」

「事変記事ノ扱ヒ方ハ、単ニ戦争美談ノミナラズ、例ヘバ『支那の子供は如何なる遊びをするか』『支那の子供は如何なるおやつを喰べるか』等支那ノ子供ノ生活ニ関スルモノヲハ支那ノ風物ニ関スルモノ等子供ノ関心ノ対象トナルベキモノヲ取上げ、子供ニ支那ニ関スル知識ヲ与へ、以テ日支ノ提携ヲ積極的ニ強調スルヤウ取計ラウコト」

ここには、疑問をもって事実にあぶつかり、そこで工夫する子供を励まし、子どもの生活、遊びに目を向け、極端な排外的主張を戒め、<sup>(38)</sup>連帯を呼びかけようとする要綱制作者の姿勢をみてとれな

いだろうか。それは、「良き文化財を児童に与へる」<sup>(39)</sup>ために苦慮していた小川末明、坪田譲治、城戸幡太郎、波多野完治ら、児童文学、教育、心理学関係者が、この要綱作成に加わっていたことによるのであろう。

この要綱では、他方で、10才以上向けの読物は、「敬神、忠孝、奉仕、正直、誠実、謙讓、勇氣、愛情等ノ日本精神ノ確立ニ資スルモノ」であるべきことも明記されていた。それは「仮作物語」の制限により余分となったページを、「忠臣、孝子、節婦等ノ伝記モノ」や「国民史的記事」によって補充しようとしたほど、徹底していた。要綱には、疑問をもって、物事にあたることの奨励と、敬神にはじまる「日本精神」の教化というなじまない二つの内容が混在していた。その事情は、当時の滑川道夫の次の言葉に端的に示されている。<sup>(40)</sup>

「検閲にひっかかるような悪質なものがなくなったのであるが、積極的な良さを示すものもないというところに児童雑誌の現時的な最大の欠陥があるのである。悪いものがなくなったが、良いものもないといふ現状は、結局『悪い』といふことであろう。」(傍点は原文のまま)

このことは、雑誌に限られたことではないであろう。つまり、当時の、度はずれなものを抑制するという児童文化政策は、子どもの文化をめぐる二つの力の拮抗関係をそのまま写し出していたのである。

このように要綱には、児童図書検閲の趣旨が全体に貫ぬかれていたというわけではなく、滑川のいうような「積極的な良さ」を導き出せる可能性を孕んでいたといえよう。歴史を「反省の学」として、また疑問を出発点とする「実験の史学」として考えていた柳田の先の整理は、この「積極的な良さ」につらなるものであったといえないだろうか。柳田は、子どもの文化に注目し、「文化は『改良』の意である」<sup>(41)</sup>とした。それが、直接的交流がなかったとしても、城戸らの「良き文化財



を児童に与へる」ための努力と重なり、「積極的な良さ」につらなる子ども向け読物の執筆へと導びいていったのではないだろうか。

柳田は、この拮抗状態がくずれつつある中で、先の「史心」を養成するテキストともいえる子ども向け読物を独自に書きはじめた。『こども風土記』（1942年）、『火の昔』（1944年）、『村と学童』（1945年）等がそれである。「所謂軍事教育が日本人を『戦ふ国民』とするといふ懸念は、恐らく絶対に無い」<sup>(42)</sup>といていた柳田であるが、20年後、警戒警報、高射砲の音を近くに聞き、あわただしく揺れ動く日々を送る中で、疎開先の子どもたちに向けて、読物を書いたのである。そこでは、かつて青年・学徒に語りかけたと同じように、疎開で生活が大きく変わった子どもたちに向けて、自らの疑問を出発点として、物事の由来をたずね、疎開先での見聞を大切にせよと語りかけたのである。

この疑問にはじまり、観察と比較・分類、そして予測（仮定）へと進む「史心」養成過程を、次にみてみたい。本稿では、衣食住の全体と精神生活に即して論じている、『村と学童』を考察する。それは、「史心」養成の一つの典型と考えられる。

#### 四、「史心」養成のためのテキスト

##### (一) 『村と学童』の構成

『村と学童』は、数編の論考から成っている。<sup>(43)</sup> その論考を大まかに整理してみると、次のようになる。

論考名	内容
一、「母の手毬歌」	子どもは、遊び・歌を介して過去を保存
二、「親棄山」	文化伝達の素地について
三、「マハツブの話」	衣食住にみられる文化
四、「三角は飛ぶ」「三度の食事」「棒の歴史」	文化伝達の媒介について
五、「千駄焚き」	村での協力・共同にみられる文化

ここには、柳田の示した子ども観と「史心」養成のカリキュラムとその内容が一つ一つ的话题として盛り込まれている。

柳田は、1944年12月に、「子どもは新語をつくる」を内容とする小学校5、6年生向け読物「蟻地獄と子供」を書いている。<sup>(44)</sup>それは、『村と学童』の論考の直前に執筆されたものであったが、『村と学童』には収められなかった。一の「母の手毬歌」とこの「蟻地獄と子供」を合わせて考えれば、柳田は、先に考察した子ども把握を、『村と学童』の一つの柱にしようとしていたことが、よりはっきりしてくる。三では、人々の生活は工夫と改良の歴史である、ということ、生活の基本である衣食住の面から明らかにしようとしている。そして、この有形文化の対ともいえる村人の協力と共同の生活が、信仰心の面から五で考察されている。これらは、いわば「史心」養成のテキストといえるものである。二と四では、それら有形・無形の文化の伝播を可能にする素地あるいは媒介について論じている。そこには、柳田の文化観が示されていた。

##### (二) 「史心」養成のテキスト

###### —仮説に枠づけられた事例による実証—

柳田は、「三度の食事」の最初で、歴史は将来の生活を定める上で「大きな参考」になるのであり、その知識は十分に正確なものでなくてはならないと述べ正確な事実把握にもとづく歴史的な考え方を強調している。また、日本人の生活は毎日の改良の歴史であり、どこに親たちの苦勞した点があるかを知るとともに、別にまたどの部分が十分でなかったかをみきわめるだけの目と判断力を自ら養うように心がけなければならないともいっている。「三角は飛ぶ」「三度の食事」「棒の歴史」「千駄焚き」はこれらの強調点を具体的に示したもので、という意味での典型例である。ここでは、その中から、「三度の食事」「棒の歴史」を例にとって、「史心」養成の過程をみてみたい。

「三度の食事」の「小みだし」が、柳田の「史心」養成過程にそって設けられていると考えられるので、まずその「小みだし」を参考にして整理する。それは、次のように構造化することができる。

<「三度の食事」の「小みだし」とその位置と役割>

d	c	b	a	
④ ③ ② ① 「お菓子の歴史」 「お茶の始まり」 「間食といふ言葉」 「小昼飯とコバサマ」 「昼飯と昼寝」 「三つの変遷」 「三つの変遷」	② ① 「農業と野外の食事」 「狩と伐木と旅行」 「臨時食物のある日」	② ① 「飯時と茶時」 「ケドキは飯時」 「ケドキは飯時」	「お昼とは何か」 「人生の宿題」	小みだし
「遅い朝食」 「砂糖の魅力」				
「証拠固め」 「仮説の提示（小仮説）」	「証拠固め」 「仮説の提示（作業仮説）」	「証拠固め」 「仮説の提示（全体を貫く仮説）」	「観察、目的の提示……疑問への整理」	論考全体の中での位置と役割

aでは、これからの人生の中で、なるほど大切な歴史だ、調べてみたい、という気持ちになれば、その知りたいことの答はでてくるであろうという。まずはその気持ちにさせることである。その「調べてみたい」という気持ちをおこさせるために、これでもか、これでもか、と様々な事例をもって来る。自分の経験を大切にしろというのもそのためである。そして、次には、何でも調べてみる価値はあるのだけれども、それらの中で「これはおもしろい」と思ったことに注意を向けてみようという。興味をもって、見たり聞いたりしたことは、そんなに骨をおらなくても覚えることができるか

らである。面白いと思った時、何が面白いのかを探り、なぜ面白いのかを考えさせようとする。

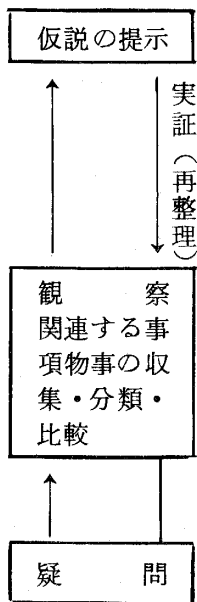
そこで柳田は、日々欠かせない三度の食事をとりあげる。三度の食事は、実は朝夕の二食に臨時の食事としての昼飯が変化して加わったものであろうという。このことを明らかにするために、柳田はまず朝食・夕食と昼食のちがいを疑問の形で整理する。ちがいとしてあげられたのは、①朝・夕の食事は、家族が序列正しく並び、同じ時刻に同じ物を分けて食べるが、昼食はそろうことはない、②昼食の器が携帯用になっており、しかも中身は分量、品数とも少ない、というものだった。これならオレもできるかもしれない、と読者である子どもたちは思ったであろう。この疑問をもとに、そもそも昼飯は常食ではなく、朝夕の食事と異なる目的をもったものではなかったか、と仮説を出す（表中bの①）。そして、昼食が「常」なる食事ではないと考えたのと同じように、かつての食生活における「常」ではない食事、つまり「臨時食物」に目を向ける。それは作業仮説ともいえるものであった（表中cの①）。さらに、何故このような異なる目的をもつ食事が、今日のような同じ役割をするようになってきたのかを問い、近世になってからの食生活が変遷したのではないか、と仮説を立てている（表中dの①）。

このように、昼食はどのような食生活の中から生まれてきたのかを、現存する豊富な事例によって歴史的にあとづけようとしていた。それは、論考全体としては、表に示したように、疑問を解くという目的にそって仮説がたてられ、その仮説を様々な事例で証明する、という構造になっていたのである。

この探究の手順は、次のような柳田の民俗学研究の方法として示されたものであった。

「自分たちの夙に唱へて居た郷土研究は、本来は疑惑から出発して居る。それが新たに得た知識の分類と比較とによって、同じ1つの民俗間

の数多い一致と類似と差異とから、次第に少しずつ解釈せられて行くのを期して居るのだから、いつ迄も仮定と次の疑いとを以て充ちては居る。ここには、疑問から観察(分類・比較)へ、さらには仮説へ、という過程が示されている。しかし、これまでみてきたように、「三度の食事」では、疑問から仮説、そして仮説の実証という過程をとっているのである。これと同じことは、次にみる「棒の歴史」にも、他の論考にもいえることである。この民俗学研究の方法と「三度の食事」等にみられる探究の手順のちがいはどうしたことなのだろうか。それは、疑問から観察(分類・比較)へ、そこから仮説の設定へ、そして、その仮説にしたがって事実を再整理するという過程の、観察の部分が省かれている、ということではないかと思う。いいかえれば、どのような観察にもとづき、仮説が導びかれるのかの過程がほとんど自明のものとしていたのではないか、ということである。このように考えると、探究の手順を、柳田は次のように考えていたのではないだろうか。疑問にもとづく観察を行い、そこから仮説を導びき出す。そして次にその仮説のもとに観察した事実を再整理(つまり、実証)する。柳田の「史心」養成過程とは、この1つのサイクルを思わせるものであったといえよう。



このように、柳田は、非常に実証性を重んじ、それぞれの論考で人々の生活実態を豊富な事実によって明らかにしようとする。しかも、柳田の論考は、単に事実の羅列による実証ではなく、仮説にそった筋道のある、選ばれた事実によって証拠を固める、という性格のものであった。そして、仮説は論考全体を太く貫ぬく仮

説と、それに依拠した作業仮説、さらに一つ一つの豊富な事実をつなぎ合わせる小仮説というように、何層かの仮説によって構成されているように思われる。「三度の食事」でいえば、表中bの①が全体を貫ぬく仮説、cの①が作業仮説、dの①及び③が小仮説である。

このことを「棒の歴史」にみてみよう。論全体を太く貫く仮説は、「棒」の歴史をみれば、日本における運搬方法の歴史が明らかになるのではないか、というものである(次の表中、bの①)。そして、その運搬方法をみるためには、まず手と背

「棒の歴史」の小米だしとその位置と役割

c			b	a	
③	②	①	②	①	
「天 秤の 棒の 特色 」	「サ スの 棒と の分 類メ 」	「背 の始 めち 」	「水 を運 ぶ技 術」	「歴 史は 単純 でない 」	「風 呂敷 包み 」
「小 仮説 と証 拠固 め」	「運 搬す る時 の背 の役 割に 着目 」	「小 仮説 と証 拠固 め」	「作 業仮 説の 提示 」	「全 体を 貫ぬ く仮 説と 文化 の不 均等 な(多 層的 )発 展に 関す る仮 説の 」	「疑 問へ の整 理」
「棒 によ る運 搬の 考察 」					「論 考全 体中 での 位置 と役 割」

中による運搬方法をみなくてはならない、と作業仮説を出す(表中bの②)。この作業仮説にそって、手に関わる運搬方法について述べる部分(表中cの①)、背負いに関わる部分(表中cの②)、そして、棒についての考察部分(表中の③)というように、「棒の歴史」全体は構成されている。この時、表中c項のそれぞれには、たとえば「運

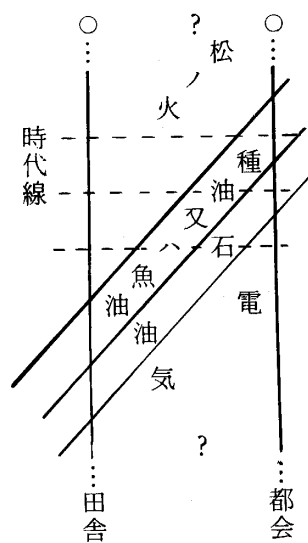
ぶという時には、手を明けておこうとすることが1つの筋ではなかつたろうか（「水を運ぶ技術」）、同じ背負いでも「かる子」と「連雀」とはもともとは別の系列ではなかつたか（「連尺あきない」）とか、棒を使い始めるきっかけは、道路の改良を一つの必要条件としていたのではないか（「棒の始め」）等の小仮説が織り込まれている。豊富な事例はこのように仮説の格子にそれぞれ位置付けられているところに、柳田の実証的展開の特徴があった。一面、「迷路に陥いるごとく混乱を覚える」柳田の論考ではあるが、このような仮説にそった展開が、知らず知らずのうちに読者を引き込んでしまう理由となっていたといえるであろう。子どもたちは、このことに少なからぬ好奇心をかきたてられたのではないだろうか。

これまでみてきたように、「史心」養成の過程は、疑問にはじまり、その疑問に関連する事項・物事の収集・分類・比較を行い、そこから仮説を提示し、次にその仮説にそって、収集、分類・比較した事例を再整理するかたちで実証していく、というものであった。その過程におけるねらいは、①すべての物事に、歴史はあること、②物事は変化していること（人の生活は改良の歴史であったこと）、③その変化には必ず原因があること、という「史心」を子どもたち自身が身につけるということであった。『村の学童』にとり込まれた衣食住を中心とする生産文化と精神文化を「史心」のカリキュラムの内容とすれば、それを、本節で考察した探究の手順によって、子どもたち自身のものですることが、柳田の「史心」養成課程での目的であり、内容と方法であったといえよう。

### ㊦ もう一つの仮説

ところで、この「棒の歴史」には、もう1つの仮説があった。それは、文化は、都市と農村部とは不均等に伝播するかにみえて、実は連続的で多層的存在である、というものである。柳田は、「棒の歴史」の中で不思議に思うことの一つとし

て、どうして古いはこび方と新しいはこび方とが並んで存在していることをあげていた。それは、家や地域によって、どうして言葉とそのアクセントがちがうのか、という文化伝播の不連続な面についての疑問であった。柳田は、「棒の歴史」の中では、「この改良が至って新しく斯ういふ運搬の必要がなほ続いて居るからである」とこたえていた。つまり、柳田が「実験の史学」で図解しているよう<sup>(4)</sup>に、田舎と都会とを比べれば、不均等に伝播しているようにみえるが、日本全体としてみれば、文化は多層的な構成を保ちながら伝播する、ということである。このように、文化の伝播を、不連続な面よりも、連続的な面からみている



のである。それは、外国から伝わった親棄山の昔話とそれ以前から日本に伝わっていた親棄の昔話を比較した「親棄山」での説明によく示されている。この仮説は、柳田の示した歴史学、歴史教育の基調となるものであったといえよう。とい

うのは、「方言周圏論」の提唱、「屏風などを折返すやうに」世の中が変わるといような歴史観の否定、「現代生活の横断面」によって歴史を明らかにするという方法、等々にみられる柳田の論理を支えるのがこの文化観であったからである。

### <注>

- (1) 柳田国男『故郷70年』朝日新聞社（1974年）251頁
- (2) 柳田国男「郷土誌編纂者の用意」『定本柳田国男集』（以降、『定本』と略記する）25巻 9頁 筑摩書房
- (3) 柳田国男「相州内郷村の話」同前33頁
- (4) 柳田国男「郷土研究ということ」同前224-228頁

- (5) 柳田国男「童児と昔」(1924年)『定本』20巻 339頁
- (6) 柳田国男『明治大正史世相篇』『定本』24巻 129頁
- (7) 柳田国男「小さき者の声」(1927年)『定本』20巻 371頁
- (8) 柳田国男「西はどっち」(1931年)『定本』19巻 252頁
- (9) 柳田国男「自序」(『小さき者の声』1942年)『定本』20巻 336頁
- (10) 柴田武「方言周圏論」『講座日本の民俗—総論』に調査票が紹介されている。
- (11) 柳田国男「蝸牛考」『定本』18巻 19頁
- (12) 同前 24～27頁
- (13) 同前 25頁
- (14) 同前 60頁
- (15) 同前 27頁
- (16) 同前
- (17) 本文中の5つの区分は次のように行った。
- (1) 「鹿・鹿・角・何本」～「おもちゃの起り」(2) 「木の枝の力」～「大人から子供へ」(3) 「小児の役目」～「こども組」(4) 「女兒のままごと」～「子どもの新語」(5) 「くばりごと」～「国語と子供」
- (18) 柳田国男「こども風土記」『定本』21巻 38頁
- (19) 同前 40頁
- (20) 同前 45頁
- (21) 柳田国男「ブランコの話」『定本』436頁・442頁
- (22) 前掲「こども風土記」『定本』21巻 23～24頁
- (23) 小川太郎『立身出世主義の教育』黎明書房(1957年)46頁
- (24) 柳田国男「農民史研究の一部」(1927年)『定本』16巻 400～401頁
- (25) 前掲「こども風土記」『定本』21巻 52頁
- (26) これは、菅が大正時代の『赤い鳥』に代表される児童文化を探るのには、「この一巻の適格性は高く評価されるとした」『児童自由詩集』の序文の一節である。(菅忠道『日本の児童文学』)
- (27) 同前 107頁
- (28) 柳田国男「南島研究の現状」(1925年)『定本』25巻 159頁
- (29) 柳田国男「旅行と歴史」『定本』25巻 130～131頁
- (30) 同前
- (31) 同前 132頁
- (32) 柳田国男「青年と学問」(1925年)『定本』25巻 87頁
- (33) その可能性として、産業革命による国民生活(特に農民生活)の激変を念頭におきながら、①日本では、その変化が短期間であったこと、②日本はその変化の最中にあること、③欧米のように「種族の混和」に基づく「文化の多元性」はあまりみられないこと、④したがって諸外国よりも、容易に民俗学を研究することができる、という点をあげている。(「郷土研究の将来」、『国史と民族学』)
- (34) 柳田国男「史学と世相解説」(1935年)『定本』24巻 108頁
- (35) 柳田国男「歴史教育の話」(1940年)『定本』24巻 97頁
- (36) 柳田国男「涕泣史談」『定本』7巻 341頁
- (37) 柳田国男「実験の史学」(1935年)『定本』25巻 517頁
- (38) 要綱の最後の項には、次の文が入っている。  
「支那兵ヲ非常識ニ戯画化シ、或ハ敵愾心ヲ唆ルノ余リ支那人ヲ侮辱スル所謂『チャンコロ』等ニ類スル言葉ヲ使用スルコトハ一切排スルコト」
- (39) 城戸幡太郎「児童文化と国民文化」『児童文化』下教育科学研究会編 西村書店(1941年)8頁
- (40) 滑川道夫「児童の読書生活と雑誌」『児童文化』下 418～419頁
- (41) 柳田国男「文化運搬の問題」(1934年)『定本』24巻 453頁
- (42) 前掲「青年と学問」『定本』25巻 87頁
- (43) 『村と学童』は、1945年に初版が出た。それは、「はしがき」「母の手毬歌」「親葉山」「マハツプの話」「三角は飛ぶ」「三度の食事」「棒の歴史」から成っていた。1949年には芝書店から『母の手毬歌』として出版され、そこで「千駄焚き」「あとがき」が入れられ、「三角は飛ぶ」「棒の歴史」が除かれている。その後、1952年にはポプラ社から『母の手毬歌』が出る。本稿では、1962年、筑摩書房版によった。
- (44) 柳田国男「炭焼日記」1944年12月27日『定本』別巻4 141頁
- (45) 前掲「実験の史学」『定本』25巻 512頁

<付記> 本論文は、大学院での庄司和晃ゼミ(

柳田民俗学の教育学的研究)で発表したものに加筆したものである。まとめるにあたっては、庄司和晃著『柳田民俗の子ども観』『柳田国男と教育』

に多くを学んでいる。庄司氏をはじめ、ゼミ出席者に、ここで感謝の意を表しておきたい。